

岡正雄の跡

——大林太良とネリー・ナウマンの比較神話学——

クラウス・アントニ

ウイーン大学における元来民族学的であった日本学はヴィルヘルム・シュミット、そしてヴィルヘルム・コッパースと密接な関係にあるいわゆるウイーン学派民族学に基礎をおいている。一九二九年、民族学者岡正雄はウイーンに渡った。やがて岡は、その地の日本学研究の創設者として認められるようになる。そこから比較文化人類学の問題提起と研究法が生まれた。比較文化人類学は広い意味でローベルト・ハイネゲルデルンやヴォルフラム・エーバーハルトのような著名人と繋がりがあり、主題的に中国南部の文化（越）並びに日本の地方文化（とりわけ出雲）についての観点と関連があった。文化比較的主题複合⁽¹⁾、越「出雲」がウイーン大学での当時の民族学的日本学研究と密接に関わり合っているということ、そして結局のところ日本民族学者岡正雄に由来するものであるということは明らかである⁽²⁾。

とりわけ日本神話研究にとって比較的アプローチは効果的であると判明している。岡正雄は早くも一九三〇年代にウイーン大学で古代日本に関して五つの文化層についての学説の構想を練っていた。それぞれの文化層は固有の

経済形態を持っており、その経済形態に組み込まれた日本神話の総合複合体からの神話には特徴があったというものである⁽³⁾。

この分野の専門家らの間でよく知られており、後にネリー・ナウマンの名で有名になった若⁽⁴⁾Tsunelda Jost (トゥー スネルダ・ヨースト) はウイーン研究所の学生の一人であった。ネリー・ナウマン記念論文集の中でマリア・ヴェレーナ・ブリュメルが述べているように、ナウマンはローラッハの（一人文主義）ヘーベル・ギムナジウムでの高校卒業試験後、一九四一年からウイーン大学にて日本学、中国学、民族学、哲学を学んだ。学位論文『日本の信仰と習俗における馬』のテーマ決定にもかかわらずウイーン学派民族学の強い影響のもと、ナウマンは日本学研究の道へ足を踏み入れた。一九四六年、ウイーンにおいて博士号取得後、ネリー・ナウマンは中国人男性と結婚し数年にわたって中国に滞在したが、その間にもさらに日本研究を進めた。一九四九年にはナウマンは武田久吉氏の著作『農村の年中行事』のドイツ語訳が刊行された。ドイツに帰国して以来、ネリー・ナウマンの研究はますます日本の山神信仰のような宗教的現象に、そして一九七〇年代からは日本神話に集中した。ここでナウマンは、岡正雄とアレクサンダー・スラヴィックの時代からはつきりと表現されている根本的なウイーン学派のテーマ⁽⁵⁾と繋がりを持った。とりわけ出雲神話の比較的研究とその中国文化圏、特に越文化への関係がナウマンの関心の中心であった。そのためナウマンは日本神話の分析の際には常に日本以外の資料も取り入れて比較した。

かくして日本の比較神話研究はウイーン学派から大きな影響を受けた。先ほどのネリー・ナウマンと日本人学者大林太良が国際的にこの研究の方向性を代表する二人である。次の解説はこの優れた二人の学者の神話研究を題材としている。

一 ネリー・ナウマン

明治時代後期から太平洋戦争終結まで神話やとりわけ日本紀の中で天照大御神が孫邇邇芸命と彼の子孫に下した神勅が近代日本国家の精神的基礎をなしていた。多くの事例が示しているように、(とくに歴史批判的な意味で)神話の科学的な研究は神聖とみなされている国家の見解と必然的に衝突するものであった。日本の神話と外界、すなわち大陸本土と南の島々の伝承との繋がりを示す証拠は日本が「神国」であるという教義を揺さぶるものであった。

戦後始まった自由な学術的神話研究の啓蒙的な影響は非常に重要である。日本民族とその支配者一族の起源についての教義上の学説の代わりに、極めて複雑で歴史的に遠く段階づけられた民族発生過程があったという見解が世に出てきた。日本文化の起源はその誤った虚構から解放され、東アジア史だけでなく人類全体の総体関係の中に据えられた。

比較分析によって、神話総集成のうちのかつての独立した神話群の存在が証明された。それは結局のところ日本文化自体が本来異質な要素で構成されているということを示すものである。

ナウマン先生は広範囲にわたる日本民俗学と宗教史、特に日本神話の研究において首尾一貫して歴史的見地に立った。ナウマンの見解はその時々時代に即した伝承現象を把握するものであり、その伝承現象を不滅のいわば形而上学的に見える普遍的日本文化の証拠と見なすものではなかった。そのようにしてナウマンは文化発生における変遷の事実を明確に示した。ネリー・ナウマンの極めて徹底的に調査された日本神話資料は文化が発展し常に変化しているということを示す好例である。八世紀の国家神話における政治的背景がはっきりと認識されている一方で、ナウマン

は事例分析という手段を通して総集成の個々の神話構成要素に本来の宗教的意味を再発見できた。王朝的な理由から神話を体系化によって拘束力のあるものにしたのは天武天皇(六七三―六八六)であったが、その天武天皇は宗教的観点において完全に仏教に付随していたとナウマンは常に著書の中で強調している。神話の本来の宗教的特質は歴史的週及の枠内でのみ明らかになった。原史、先史時代へ遡ることは神話がまだ宗教上の本来の意味で認識された文化的環境を探り出す機会となった。

筑波大学日本民俗学の宮田登教授は一九八九年二月一五日の「毎日新聞」に掲載された「ネリー・ナウマンの日本学に学ぶ―日本文化の普遍性について」というタイトルの寄稿論文の中で日本の研究状況に顧慮してこう確言している。(ナウマン)女史独得の斬新で鋭い分析が、若い世代の研究者に知的関心をよび起こしたと思われる。(原文引用)しかしながら、宮田教授の見解によるとナウマンの著作の意義は日本の専門学への肯定的な刺激作用に限るものではない。宮田教授はネリー・ナウマンの著作を日本文化研究にとっての根本的意義の貢献や時代遅れの文化本質主義的確信を疑問視するものとして見ている。(日本研究を深めることによって、人類共通の文化の核を発見できるという彼女の姿勢は、とかく日本文化の特異性にこだわりがちな日本文化研究のあり方の基本にかかわるものといえる)。(原文引用)。

日本学の民族学的傾向によりネリー・ナウマンの研究が特徴づけられながらも、常に根拠づけられた文献学的解釈の基礎に基づいており、日本を文化比較の見地において追求するかどうかはネリー・ナウマンにとって疑問を意味することはなかった。ナウマンは柳田國男のような権威者に挑むだけでなく、普遍的背景における初期日本文化の包括を立証した。

ドイツ語圏の日本学はご存知のように互いに密接な相関関係にある二種類の異なった起源を引き合いに出してい

る。一方は民族学に分類されるいわゆるウィーン学派、もう一方は日本の国学との直接的な共通点を指摘する大多数の文献歴史学に基づく学派である。⁽⁵⁾ここで問題となっているこのテーマについて掘り下げることはしないが、私の考えではナウマンの著作を評価する上でこの方法的公理をはっきりさせることは不可欠である。

ひよつとすると自覚していなかったかもしれないが、ネリー・ナウマンは彼女のテーマから近年の政治的、イデオロギー的な議論の中心にいた。第二次世界大戦終結後まもなくナウマンは初めて原史と日本の神話に関する論文をドイツ語圏内で発表した。終戦までのほんの数年前、日本とドイツが公式に神聖とみなしていたことと全てにおいて全く対照的なことが書かれている論文であった。国学の伝統に合わせた民族主義的な日本宗教史の解釈に対しての誘惑に惑わされない、唯一実行できる手段がナウマンにはあった。原典資料を調べること、解釈学的比較、すなわち史料批判的に分析すること、その際にいつも物質文化の人工遺物と日本以外の比較領域にも注目することである。

明治時代におけるこれらのあらゆる主題のイデオロギー浸透次元はネリー・ナウマンの著作には表現されていない。^{『日本神話』}これは彼女にとって謎に満ちた国体構築の手段ではなく、ただ歴史的史料批判の手段を用いて比較研究すべき日本原史の部分領域を意味した。このあらゆるイデオロギー浸透に抵抗する方法論的アプローチにおいてナウマンの学術著作の中の普段ならばかろうじて納得できる衝撃性が明らかになる。

二 大林太良と日本神話の起源

大林太良先生の研究もウィーン大学で重要な影響を受けた。一九五九年、彼はウィーン大学で博士論文を提出し、引き続き比較神話研究の方向で研究を進めた。

残念ながら早くに亡くなられたが、当時東京大学民俗学の教授だった大林太良は日本の戦後研究において批判的文化比較的研究法の構成の際に重要な役割を担った。大林先生は自身の比較研究的アプローチをもって今日の日本の研究に大いなる影響を与えた。一九八六年、大林は自身の最も重要な論文を厳選した論集『神話の系譜 日本神話の源流をさぐる』⁽⁶⁾を出版した。それは彼の研究と日本神話についての彼の考察の方法的基礎においての見通しが立つものであった。

ここで大林は日本神話の起源に関する自身の根本的な考察を表明し、首尾一貫して自身の根本的著作一九六一年に出版された『日本神話の起源』⁽⁷⁾で始めた道を突き進んでいる。

しかしながら、例えば一九八五年の神話の理論についての論集の中で依然として通時的に研究している歴史地理学的研究法は一九世紀に属するものであり、それ故に非歴史的研究法がその後を継ぐものであると示しているアラン・ダンデスのような他の執筆者にひきかえ、大林は徹底的な資料と主題研究の領域において歴史的、そして地理学的な繋がりへの解明への道を認識している。この研究法は日本神話の複雑な構造を見極めるだけでなく、それを超えて適切な歴史的、地理学的背景から個々の神話構成要素を理解する手段を研究者らに提供した。

大林は自身の非常に包括的で詳細な著作『神話の系譜 日本神話の源流をさぐる』⁽⁸⁾を後書きで締めくくった。そこで大林は自身の研究活動の中心問題についての概要を述べている。ここではとくに日本神話が様々な地理的、そして文化的起源の構成要素を示しているという事実が強調されている。縄文時代の遺物と並んで焼畑耕作民文化に由来する神話と神話構成要素が存在している。その起源は南中国にあり、縄文時代後期に日本に伝来した。同様に中国南部が拡散の中心とされているにもかかわらず、大林はしばしば話題にのぼる海幸山幸神話⁽⁹⁾のような他の神話を弥生時代と関係づけて考え、その起源を南方、とりわけオーストロネシア語族の領域に見ている。最も似通った類例が朝鮮に

において見られる王権神話の複合体を大林は古墳時代のものであるとし、その類例を朝鮮半島の支配者層と日本の天皇家との深い繋がりを示す証拠と見ている。大林の考察によると、神話の資料とモチーフの世界的な拡散における要所は中央アジア地域にあるという。さらに大林はユーラシア大陸の高度文化の神話と多くの日本神話に緊密な繋がりがあるという自身の信念を言葉で表現している。ここに付け加えて、大林はいまだしばしば主張される自己分離からの日本神話の解放への方向で重要な進出を企てている。

日本神話における朝鮮、中国南部、もしくはインドネシアの構成要素の解明が厳密に学術的古代研究的関心からだけでなく、さらには現代日本の伝統的な自己理解に直接触れ得るということは、日本の近代の歴史に由来するものである。

ご存知のように、明治時代後期から一九四五年の崩壊まで神話、特に古事記に記された神話が近代日本の天皇制の精神的基盤であった。日本の「国体」⁽¹⁰⁾のあらゆる比較から解放された比類なされ、そのイデオロギーはただひたすら八世紀の資料における伝承神話の証言に基づくものであった。

とりわけ比較文化史の意味で、かの神話の学術的研究は必然的にこの神聖としてみなされた国家理解と衝突せざるを得なかった。在来の神話から大陸本土あるいは南の島々の伝承への繋がりを示すあらゆる証拠は戦前日本の「神国」であるという教義を揺るがした。

戦後に始まった自由な学術的神話研究の脱構築的啓蒙的な影響は評価できないほど大きいものである。日本民族とその支配者一族の起源についての独断的な学説の代わりに、極めて複雑で歴史的に段階づけられた民族形成の過程の考察が明らかになった。日本文化の起源はその誤った隔離から解放され、東アジアだけではなく人類史全体の総体関係の中に位置づけられた。比較分析によって、神話総集成のうちのかつての独立した神話群の存在が証明された。それ

れは結局は日本文化すなわち日本民族自体が本来異質な要素で構成されているということを示すものである。日本民族のイデオロギーに根差した民族的、文化的「同質性」の考えは水稲耕作が日本文化唯一の根幹であるというような公理的な根本的確信と同様に維持することはできなかった。

純粋な学術性によって啓蒙的な影響を与える過程において前述の研究者、ネリー・ナウマンと大林太良は非常に重要である。

以上で私の発表を終わらせていただきます。

注

- (1) Bernhard Scheid, „Oka Masao, die Wiener Kulturkreislehre und die Gründung des Japan Instituts der Universität Wien“ (未刊の講義用原稿、二〇〇七年十一月一〇日) Paily 1980, Antoni 2001 参照。岡正雄が戦時中に担った役割について Doak 2001 参照。
- (2) 日本文化発展における越文化の影響について Paily 1980, 65-66, 82, 90-91, 94 ページ 参照。
- (3) 岡 一九六六、Paily 1980, 62-64 ページ 参照。
- (4) Antoni & Blümmel 1993, 13-14 ページ 参照。
- (5) Linhart 1993 参照 (特に „Gibt es eine teutonische und eine austrazische Japanologie?“、13-34 ページ)。
- (6) 上の論集にいくつかの論評を梗概 Antoni 1988 参照。
- (7) 二〇世紀の七〇年代において大林の日本神話の系譜への当初の関心は一時的に表舞台から退いた。そしてその後、大林は日本神話全体の体系的隠れた構造を解明しようと試みる、より共時的傾向の総合視点に目を向けた。この研究方法の方針を

示すものとして、とりわけフランスの文化理論家ジュルジュ・デュメジルによるインド・ヨーロッパ（印欧）神話の三機能構造への理論的な発言は大林と神話学者の吉田敦彦にとって重要性があった。二人はこの三機能構造の根本的特質が日本神話においても現実化するとみていたが、後に大林は『神話の系譜 日本神話の源流をさぐる』の中で過去の寄り道を批判的に振り返りはつきりと自身の本来の見地の正当性を強調している（大林一九八六・三三九ページ）。

(80) Antoni 1986参照。

(81) 『神話の系譜』Schumann 1980参照。

(82) Antoni 1998参照。

【参考文献】

大林 太良（一九六一）『日本神話の起源』角川書店。

同 （一九八六）『神話の系譜—日本神話の源流をさぐる』青土社。

Antoni Klaus (1986) : 書誌 Alan Dundes(編) : *Sacred Narrative. Readings in the Theory of Myth*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1985. In: *Asian Folklore Studies*, Vol. 45, No. 2, 299-301頁。

(1988) : 書誌 大林太良『神話の系譜—日本神話の源流をさぐる』青土社 1986。In: *Asian Folklore Studies*, Vol. 47, No. 2, pp.328-330.

(1998) : *Shinto und die Konzeption des japanischen Nationalwesens (kokutai). Der religiöse Traditionalismus in Neuzeit und Moderne Japans*. (Handbuch der Orientalistik, Band V/8). Leiden: Brill.

(2001) 『Fakten kontra Wahrheit? - Zur ethnographischen Arbeitsweise in der Japanologie』. In: Hilaria Gössmann, Andreas Mrugalla(編) *11. Deutschsprachiger Japanologentag in Trier 1999*, Band 1 (Ostasien - Pazifik. Trierer Studien zu Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur, Band 14). Münster: Hamburg, London: Lit, pp. 631-643.

Antoni Klaus & Maria Verena Blümmel(編) (1993) : *Festgabe für Nelly Naumann*. (Mitteilungen der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, MOAG, Band 119). Hamburg: OAG.

Doak, Kevin M. (2001) : 『Building National Identity through Ethnicity: Ethnology in Wartime Japan and After』. In: *Journal of Japanese Studies*, Vol. 27, No. 1, pp. 1-39.

Linhart, Sepp (1993) : *Japanologie heute. Zustände - Umstände*. (Beiträge zur Japanologie, Band 31). Wien: Institut für Japanologie.

岡正雄 (1966) : 『Das Werden der japanischen Volkskultur』(『日本民族文化の形成』1956, Josef Kreiner(編)) In: *Beiträge zur Japanologie*, Band 3/1, Wien: Institut für Japanologie, pp 28-54.

Pauly, Ulrich (1980) 『Japan und die Kultur aus dem Süden - Vermutete Beziehungen Japans zu Südostasien und nichtchinesischen Völkern Süd- und Ostchinas』. In: *Bonner Zeitschrift für Japanologie*, Band 2, pp.55-128.

Schaumann, Werner (1980) : 『Leistet die Mythe vom verlorenen Angelhaken (umisachi-gamasachi no shinwa) einen Beitrag zur Klärung des Problems der Herkunft der japanischen Kultur?』. In: *Bonner Zeitschrift für Japanologie*, Band 2, pp.129-145.